



チャハルモンゴル語の音声学・音韻論的研究

金, 正琳

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2023-09-25

(Date of Publication)

2026-09-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第8703号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100485887>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論 文 内 容 の 要 旨

論 文 題 目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

チャハルモンゴル語の音声学・音韻論的研究

氏 名 : 金 正 琳

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程社会動態専攻

指導教員氏名 (主) 田中真一 教授
 (副) 岸本秀樹 教授
 (副) 茶谷直人 教授

(注) 4, 0 0 0字程度 (日本語による)。必ずページを付けること。

チャハルモンゴル語の音声学・音韻論的研究

要旨

本論はチャハルモンゴル語の発音に見られる音声学と音韻論的な特徴について調査した研究である。チャハルモンゴル語は中国の内モンゴル自治区で使用されている標準語であり、世界中の様々な言語の1つとして、非常に研究の価値があると思われる。

チャハルモンゴル語は、音声学的・音韻論的に見て多くの興味深い特徴を持つ言語である。例えば、母音調和は一語の中に現れる母音の組み合わせに一定の制限が生じる現象であり、アルタイ諸語によく見られる。具体的には、チャハルモンゴル語の基本7母音は母音調和の観点から3種類に分けられ、それぞれ男性母音/a, ɔ, u/、女性母音/ə, ø, u/、中性母音/i/と呼ばれる。1つの単語内で現れる母音の種類には制限があり、中性母音は男性母音とも女性母音とも共起できる一方で、男性母音と女性母音と一緒に現れることは禁じられている。また、文字と音声の乖離も同言語の大きな特徴の1つである。具体的には、書き言葉における母音と子音は、話し言葉で素性の変化、脱落、添加などの変化を伴い、その結果、書き言葉と話し言葉との間に不一致が生まれる。例えば、書き言葉で3音節語である a.go.la（山）という単語において、第2音節の子音/g/と第3音節の母音/a/が脱落する。これによって、a.go.la は話し言葉で[u:l]という1音節語になる（a.go.la→[u:l]）。そして、発音中の母音と子音の様々な変化によって、音節構造も変化する。

これらの音韻特性は、主にチャハルモンゴル語の固有語一般に現れるが、外来語など馴染み度の低い語彙において、例外が生じて規則外になる場合がある。したがって、固有語に比べると、外来語の発音にはどのような音声・音韻的な特徴が見られ、どのような規則が求められるのかを研究する必要がある。外来語を対象とした分析を通じ、チャハルモンゴル語の音韻特性の多様性への理解を更に深めることができる。他には、発音に現れる母音・子音と音節構造の変化はアクセントやリズムとも関連性があることが考えられる。チャハルモンゴル語のアクセントやリズムに関する研究と調査はあまり行われておらず、研究者間で意見が一致していないのが現状である。それ故に、アクセントとリズムについても調査を行う必要がある。

チャハルモンゴル語の発音を研究することによって、同言語の音韻特性を示す上で、一般言語学的な分析もできる。世界の異なる地域に分布する、一見全く関係ないように思える言語にも、実は共通性がある。例えば、多くの言語において、母音連続は許されず、子音挿入、母音脱落、母音融合をすることでそれを避けようとする傾向がある。その原因は、自立性の高い2要素の衝突を回避しているからである。言語はそれぞれのオリジナルな音声と音韻的な特徴を持つが、それは外面的

なものであり、内面的には多くの言語に共通する一般的な規則と制約が存在することが分かる。チャハルモンゴル語の音韻特性を研究することを通し、その背後にある一般言語学的な特徴を明らかにすることが期待される。

本論はチャハルモンゴル語の実際の発音を基にし、外来語における母音と子音、音節構造、母音調和、また伝統歌謡のテキストセッティング、固有語、外来語、複合語のアクセントなどについて調査し、それぞれの音声学・音韻論的特徴を示す上で、各音声・音韻要素の間に関連性があることを主張する。さらに、チャハルモンゴル語の様々な音声学・音韻論的特徴は他言語とも共通性が見られ、一般言語学の観点から解釈できることを指摘する。そのため、本論は以下の調査と分析を行った。

まずは、第3章で外来語の発音に見られる母音の変化について調査した。母音の変化というのは、母音の素性変化を指す。チャハルモンゴル語の母音調和に違反する49語を10人の調査協力者に発音させて分析した結果、母音の変化の仕方は、その種類により大きく異なるということが分かった。チャハルモンゴル語の母音は、周辺母音/a, i, u/と非周辺母音/ə, ɔ/の2種類に分けられる。周辺母音の保持率は高く、より安定しているのに対し、非周辺母音の保持率は低く、発音の中で変化しやすい。また、母音の変化方向を見ると、「非周辺→周辺」の割合が「周辺→非周辺」より明らかに高いことが確認できた。つまり、母音の変化には方向性が見られる。母音の保持率と音節位置の関係について、周辺母音と非周辺母音共に初頭音節で保持率が高く、変化しにくい。このような周辺母音と非周辺母音の違いは一般言語学的理論において、母音の有標性と位置的忠実性に関係する。周辺母音/a, i, u/は無標な母音であり、より発音しやすいので、発音に見られる変化が少ない。また、安定性の高い周辺母音と変化が激しい非周辺母音が両方とも第1音節でより多く保持されることは、語頭位置は優越的であり、音韻対立が保持されやすいという位置的忠実性制約が働いているからである。その他、発音データの約半分は母音調和を引き起こし、外来語の発音においても母音調和の影響が見られることが確認された。

次に、第4章の前半部分で外来語の音節構造の変化について調査を行った。音節構造に変化が生じる可能性がある外来語106例を10人の母語話者に発音させて分析した結果、母音脱落・子音脱落・母音添加という3つの現象が観察された。母音脱落は語中と語末の軽音節で、子音脱落は母音に挟まれる半母音/j, w/に集中し、母音添加は語頭と語中の子音連続の間に頻繁に現れる。これらの変化は主に母音調和と音節の有標性に関係する。母音調和について、単語内のある母音が脱落することによって、残りの母音は母音調和を引き起こす。また、単語内に添加される母音は単語全体の母音調和に従う必要がある。音節の有標性について、チャハルモンゴル語の母音と子音脱落は語頭

以外の CV という音節を回避するために生じる。その結果、無標な CV よりは語頭以外で有標な CVC と CVCC が現れやすい傾向が見られた。母音添加は語頭と語中の CCV を避けるためであり、無標な CV を形成する。また、coda において、CVC と CVCC は有標性が高いが、onset の CCV と比べると無標であるので、チャハルモンゴル語の外来語の発音には、CCV は許されないが、CVC と CVCC は許容されると考えられる。

続いて、第 4 章の後半部分でチャハルモンゴル語のリズムについて、定型歌のテキストセッティングを調査した。チャハルモンゴル語の伝統的な定型歌「ホルボー」の 6 曲を対象として分析した結果、5 つの特徴が認められた。①チャハルモンゴル語に音節基準のフット（2 音節）指向性が見られる。②チャハルモンゴル語は音節拍リズムに属する可能性がある。③鋳型に揃えるため、特に行の初頭位置の重音節・超重音節が伸長される。④セッティング入力形にチャハルモンゴル語特有の構造が関係し、基本的に話し言葉をデフォルトとして選び、それに合わない場合、書き言葉で調整を行う。⑤鋳型とセッティング方策について、他の諸言語と多くの共通点が見られる。これらを指摘することを通し、チャハルモンゴル語のテキストセッティングは他言語と同じように、種々の韻律単位および音韻現象が関係することを明らかにした。

最後に、第 5 章ではチャハルモンゴル語のアクセントについて調査を行った。調査対象は固有語、外来語、複合語の 3 つであり、それぞれ 65 語、107 語、127 語を調査協力者に発音してもらった。その音声を分析した結果、高さを元にアクセントを決定した方が、強さを元にするよりも一貫性があり、安定した結果になることが分かった。なお、高さによるアクセントの特徴をまとめると、固有語については、2~4 音節語のアクセント位置はすべて第 2 音節である。外来語のアクセント規則については、3 音節語以外はすべて第 2 音節にアクセントが置かれ、3 音節語は第 3 音節にアクセントが置かれる。また、複合語のアクセントは常に前部要素の最後の音節に来る。第 4 章で、語頭位置に軽音節と重音節の対立があるのに対し、語頭以外ではほぼ重音節か超重音節であることを指摘した。語頭以外の位置にアクセントを置くのが理想的であり、第 5 章の調査結果もそれを裏付ける形となった。他には、第 4 章で指摘したフットもアクセントと関係し、フットによってアクセント位置を解釈できることを示した。

これらのことから、チャハルモンゴル語の様々な音韻特性は互いに関連性が見られ、世界中の他の言語とも共通性が認められることがわかる。具体的には、チャハルモンゴル語の発音における素性変化について、変化する母音は周辺母音と非周辺母音に分けられ、そこに母音の有標性制約と位置的忠実性制約が働いている。母音脱落・子音脱落・母音添加によって、語頭以外の位置では、重音節・超重音節が形成され、そこには音節の有標性が働いている。母音の変化は母音調和に影響さ

れ、母音調和に違反する外来語は、母音の素性変化や母音脱落・母音添加によって、単語内の母音調和を引き起こす傾向がある。また、音節とリズムについて、テキストセッティングは音節構造の変化による音節数の差異を利用してリズムにテキストを当てはめている。そして、語頭以外の重音節・超重音節の位置でアクセントが置かれやすいことも確認された。更に、テキストセッティングとアクセントに関して、テキストセッティングで検証されたフットによって、単語のアクセント位置を解釈することができ、アクセント調査から確かめられたアクセント位置と、テキストセッティングでの各小節の位置が揃っていないことから、チャハルモンゴル語は音節拍リズム言語であることが強く示唆される。

論文審査の結果の要旨

氏 名	金 正琳
論 文 題 目	チャハルモンゴル語の音声学・音韻論的研究
要 旨	
本論文は、チャハルモンゴル語（中国・内モンゴル自治区公用語）の分節音からアクセントに至るまでの事象を、一般音声学および音韻論の視点から分析し、新たな知見を提供するものである。同言語は、アルタイ語族でよく観察される母音調和現象(vowel harmony)が有名であるが（服部 1951; Svantesson 2008）、リズムやアクセントなどの韻律（プロソディー）を扱った論考は多くなく、また、質量ともに音韻研究の蓄積も不十分であるのが現状である。本論文では、これらの現状を踏まえ、母音調和現象に加えて分節音の削除・挿入、音節構造の変化、アクセント規則といった幅広い現象の分析を音韻論的観点から試みるとともに、それらの相互作用を論じている。 本論文は6つの章から構成されている。第1章は博士論文で扱う研究課題と全体の構成について述べている。続く第2章では、分析に関係する音声学・言語学的概念、および、チャハルモンゴル語の基本的な音韻構造について確認し、本編で扱う音韻現象の背景、および問題の所在について述べている。 第3～5章は、本論文の中核を成す章で、それぞれ、分節音（第3章）、リズム（第4章）、アクセント（第5章）を分析している。まず第3章では、外来語における母音調和を分析し、母音調和規則の適用・非適用に、母音の種類および生起位置が関与することを見出している。母音を周辺母音/a, i, u/と非周辺母音/ə, ɔ/とに分け、このうち周辺母音における規則の適用率が低い（入力母音が保持されやすい）のに対し、非周辺母音における適用率が高い（母音が保持されにくい）ことを指摘している。また、変化の方向性について「非周辺母音→周辺母音」の割合が逆の「周辺母音→非周辺母音」よりはるかに高いことを指摘している。これらの事実をもとに、母音の有標性(Gordon 2016)に基づく説明を試みている。次に、母音の語内における生起位置との関係について分析し、周辺母音・非周辺母音ともに初頭音節で保持率が高く変化しにくいことを示し、このような位置に関する非対称性が、位置的忠実性(positional faithfulness; Beckman 2003)から説明可能であることを指摘している。 続く第4章では、前半で外来語における音節構造の変化を、また、後半で定型歌を資料としたテキストセッティングを分析し、音節構造とセッティングとの関係を論じている。前半部分において、母語話者を対象とした外来語発音の分析により、再音節化(resyllabification)を含む音節構造の変化には、母音削除(vowel deletion)・子音削除(consonant deletion)・母音挿入(vowel epenthesis)という3つの異なる音韻過程が見られること、それらの生起条件に対して一定の予測が可能であることを新たに示している。母音削除は語頭以外の軽音節において典型的に生じるのに対し、子音削除は母音に挟まれた渡り音j, wに集中し、また、母音挿入は子音連続(consonant cluster)の間に現れることを指摘している。これらの変化が音節構造の有標性に基づくものであるとし、とくに母音挿入について、子音連続(CC)を回避し無標のCV音節を形成するための操作であると結論づけている。また、母音調和との関係では、入力構造が固有語と大きく異なる外来語において、調和規則に違反する母音を削除する操作によって、残りの母音が規則的に母音調和を引き起こすことを指摘している。 章の後半では、同言語の伝統的定型歌、ホルボー(holwoo)の歌詞と音楽（録音）との対応について、上記の変化を含む音節構造との対応に着目し分析し、同言語のテキストセッティング方針において、(1)音節基準によるフット指向性が見られること、(2)チャハルモンゴル語がリズム類型(Trubetzkoy 1958/1969)において音節拍リズム言語に属すること、(3)とくに初頭の重音節・超重音節が局所的に伸長されること、つまり、伸長される音節に一定の量が	
主査記載 氏名（自署） 田 中 真 一	

必要であること、(4)歌の鋳型に合わせるため、歌の入力形において書き言葉と話し言葉とが選択的に用いられることを示し、他言語のセッティング方策との共通点を指摘している。

第5章ではアクセントに焦点を当て、とくに固有語、外来語、複合語の3種について、母語話者を対象とした生成調査をもとに分析している。強さ、および高さを基準とした分析を比較検討し、先行研究で指摘されている同言語のアクセント規則「強勢（強さ基準）が語頭音節に置かれる」とは異なり、「ピッチアクセント（高さ基準）が第2音節に付与される」のが基本であることを新たに提案している。また、複合語においては、前半要素の最終音節、すなわち複合語境界のすぐ左側の音節にアクセントが置かれること、さらに、とくに3音節外来語において、例外的に語末音節にアクセントが付与されることを示している。これらの事実をもとに、同言語において、基本的に左方整列(Align-Left; Kager 1999)による弱強型フット(iambic foot)が形成されアクセント位置が計算されること、また、複合語においては、境界部を基準とした右方整列(Align-Right)による弱強型フットによりそれが計算されることを論じている。

第6章は結語である。

以上のように、本論文は、チャハルモンゴル語の音声学的、音韻論的な知見を豊富に提供しており、音声学と言語学の研究に寄与するものと言える。とくに、オリジナルの調査分析をもとに、チャハルモンゴル語がリズム類型的には音節拍リズム言語(syllable-timed language)に属することを、また、アクセント類型的にはピッチアクセント言語(pitch accent language)に属することを指摘しており、言語類型論の観点からも興味深い議論を展開している。同言語の音声・音韻は未解明な部分が多く、そのため本論文は記述分析が中心となっている。理論的分析については、本論考を出発点とした今後の課題である。いずれにしても、本論文がモンゴル語学のみならず、音声学、言語学の分野に新しい知見を十分に提供しており、評価に値することは疑いの余地はない。

以上のことから、本審査委員会は全会一致で、金正琳氏が博士(学術)の学位を授与されるに足る資格を有するとの結論に至った。

審査委員

区 分	職 名	氏 名 (自 署)	区 分	職 名	氏 名 (自 署)
主 査	教授	田中 真一	副 査	准教授	澤田 治
副 査	教授	岸本 秀樹	副 査	北洋大学 准教授	植田 尚樹
副 査	教授	ハヤシ・ハツソン			